



## 木彫り工芸の美 大阪欄間らんま

今回は、大阪を代表する伝統的工芸品「大阪欄間」を紹介します。

「欄間」とは、和風建築の鴨居の上にしつらえる採光・通風を目的とした木彫の室内装飾のことです。

欄間の起源は、今から2500年前の中国に遡ります。戦乱の中国で孔子が説法していた折、野に咲く奇蘭草きらんそうの無垢な姿に己の傲慢さを悟ったという逸話があります。そこから、孔子を慕う人の中で、蘭がもてはやされ、花の香りを室内に取り入れる手法として欄間が登場した、と伝わっています。また、大阪で欄間が発達したのは、水運の利便性により、優れた原木が入り易かったことと、江戸時代、堺の豪商による需要が増えたことです。当初、宮大工が神社、仏閣の欄間制作にあたっていました。生産が追いつかなくなり、欄間専門の職人が誕生しました。和泉市の聖神社や四天王寺元三大師堂に当時の大阪欄間の秀作を見ることができます。

実際の欄間制作の現場を見るため、大阪欄間工芸暦55年の山田健二さんを大阪堀江に訪ねました。ちょうど、大相撲三月場所の優勝力士に贈る欄間の制作中で、原木に鑿のみを入れる一心不乱な職人の気迫に圧倒されました。制作中の作品は、屋久杉を素材とし、千成せんなり瓢箪ひょうたんの中に、大阪城、銀杏の葉の中に四天王寺、軍配の中に住吉大社を配した、厚さ約4.5センチ、縦63センチ、幅80センチのもの。完成間近の作品を前に、一息ついた山田さんに話を聞かせていただきました。

細かく繊細な彫りの作業は、緊張の連続なのでは、との質問に、「長年、欄間の制作に携わっていると、木の性質がわかる。同じ木でも部分で違うから、木に話しかけ、愛情を持って優しく、強く、迷わず彫り込んでいくため、緊張とはまた違った感覚。」とのこと。まさに人の気持ちと同じだと感じました。

山田さんは、女4人男1人の長男で、後継という使命感はあったものの、昭和二十七年、十五歳の時、師匠である父の背中を見て、好きでこの道に入ったということです。朝八時から夜十時まで師匠の描いた図面に壺錐つぼまきりで孔あなを開け、鋸のこぎりで輪郭を作る作業を三年。数人の職人は、地味で厳しい作業に耐えきれず、山田さん以外は皆、長続きしなかったそうです。

修業時代の辛かったことや楽しかったことを聞くと、

「この世界、鑿のみ研ぎ三年、引き剣くり三年と言われます。冷暖房のない時代、冬は寒さに震え、やかんの湯で手を温めながら、夏は猛暑の中で作業しました。さらに一日何千回も力を込めて彫り込んでいくため、脇と腕が擦り合い、脇から血が流れることもしばしばありました。痛みをこらえての作業は辛かった。休みも月2回しかありませんでした。しかし、仕事が終わってから師匠の描いた図面を手本に、一人構想を練るのは楽しい時間でした。」

た。師匠は、手取り足取り教えてはくれないが、師匠の優れた技術を目の当たり<sup>ま</sup>にできたこと。弟子の成長を見るあたたか、確かな眼が嬉しかった。また、一日と十五日に給料500円を貰い、三本立て50円の映画を観た後、散髪して、うどんを食べることが唯一の楽しみでした。という山田さんの温和な目が印象的でした。

作業場に目をやると、ひととき大きな屋久杉と桐、杉の美しい木目を重ねた、霧に浮かぶ富士の作品が目を惹きました。作品について聞くと、「これは、オリジナルの試作品。今は住環境が変わって、大きな作品は売れないから小さな注文も受けています。誕生日のプレゼントに壁掛けなんか喜ばれるね。」とのこと。干支のねずみが印象的な壁掛けの作品は、今にもねずみが動き出すかのような躍動感と生命力が感じられました。

近年では、作品を作る一方、地元小学校の伝統工芸の学習に講師として参加。さらに、建築家や店舗設計士と勉強会を重ね、販売先も模索しているそうです。そのような活動の中で、美術学校で基本を学んだ学生が弟子入りたい、と志願してくることも。しかし、欄間の注文は少なく、せっかく取得した技術を発揮できる場が少ないという厳しい現況を説明し、断っている、など「大阪欄間」の後継者問題は切実です。

13年前の大阪APPCで各国首脳に記念品が贈呈された時には、アメリカのクリントン大統領に、山田さんの大阪迎賓館を題材とした木彫り額が贈られました。その賞状を作業場の奥に掛けてあるので、もったいないのでは、と聞いたところ、「名誉なことですが、賞状よりも、お客様に喜んでもらえたときが一番嬉しい。」とのこと。お客様と作品だけを考え、全身全霊を傾ける職人の心意気を感じると共に、山田ランマ店が受け継ぐ「大阪欄間」の伝統の灯を灯し続けることを心から願っています。

山田ランマ店

大阪市西区南堀江

3-3-10 (立花通り)

電話06-6541-9062

